詩編４５編の黙想（2021・３・17　松見俊）

キリストと教会：王の婚礼の比喩の素晴らしさと危険性

受難のキリスト：真実（’ēmet）と謙虚（柔和）と義において来られたお方

私たちの人生は計画していたことが挫折したり、思い通りにならないことも多いです。しかも、神のために、他者のためにと考え、思って事をなそうとしているのに旨く行きません。酷く、落ち込む時、ヨブ記２章を読み、「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか。このようになっても、彼は唇をもって罪を犯すことはなかった」(2:1 b -10)という言葉に恥じ入ります。しかし、これ少しカッコつけすぎ？3 章からヨブは随分神に向かって文句を言っているのですから…　。そのような中で詩編 45 編を読むと別世界、「雅歌」のような雰囲気が広がります。まず、このペーパーから離れて 45 編そのものを朗読してみましょう。

１節に「ゆり」に合わせてとありますが、同じ表現が、詩編 60、69、80 編にも登場しています。指揮者によって「ゆりに合わせて」（‘alōšō šannîm）というのですから「ゆり」という曲があったのでしょうか？どのような曲調であったのか興味深いです。モーツァルトのような響きでしょうか？また、この詩編は「愛の歌」とあり、愛らしい歌とも愛に関する歌とも解釈できますが、比喩的に言えば、主イエス・キリストと教会の深い信頼関係を、男女の親密な関係で譬えているとも言えるでしょう。ただし、「この詩は詩編中ただひとつ宗教的でない、つまり世俗的な叙情詩の例である」（A Weiser）ことも心の片隅に置いておきましょう。ちなみに、221 番「血しおしたたる」の曲も恋愛歌（Hans Hassler1601）をバッハが編曲して「マタイ受難曲」の一部にしたことも知っておきましょう。今日は、「レント」（Lent）の５週目。イエス様の受難を覚えてキリストと教会との関係を男女のカップルの関係として描いているエフェソ 5:28－29 を引用します。「そのように夫も、自分の体のように妻を愛さねばなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです。わが身を憎んだ者は一人もおらず、かえって、キリストが教会になさったように、我が身を養い、いたわるものです。」さらに詩編 45 編に即して新約聖書を引用するなら、ヘブライ１：８－9 でしょうか。「一方、御子に向かっては、こう言われました。「神よ、あなたの玉座は永遠に続き、また、公正の笏が御国の笏である。あなたは義を愛し、不法を憎んだ。それゆえ、神よ、あなたの神は、喜びの油を、あなたの仲間に注ぐよりも多く、あなたに注いだ。」（詩編 45:7－8）

1.　歓びの歌がとめどなく溢れてくる！

口語訳「わたしの心はうるわしい言葉であふれる」（rāhaš libbî dābār tōwb ‘ōmêr my heart is overflowing with a theme or a word of good recite）神が油を注がれたもの（キリスト）；真実と謙虚と正義の王」への喜びの「言葉」あるいは「事柄」が作者より沸き上がり、溢れて来ると言います。愛しいキリストよ、「あなたは人の子らのだれよりも美しく/あなたの唇は優雅に語る。あなたはとこしえに神の祝福を受ける方。」9 節までは戦士を語るゆえに一部の南部バプテストの根本主義者たちにように単純な戦争賛美にならないように注意しましょう。キリストはあくまでも真実（’ēmet）と謙虚（柔和とも訳される wə’anwāh）と義(sedeq)において輝いて来られることを忘れてはならないでしょう。

キリスト（油注がれた方８節「あなた」）は、神に従うことを愛し、神よ（ここではキリストを神よと

歌っている！）神に逆らうことを憎み給うあなたに。神は喜びの油を「あなたに結ばれた人々の前で」（あなたの仲間たちに勝って　mêhăbêrekā）注ぎ、キリストとしたもう。ここでは、平和の王の姿が登場するのでしょうか？　喜びが同輩に勝っているのか、あるいは油の素晴らしさが勝っているのかは判然としません。キリストは神と呼ばれてはいますが、ここでは「あなたの神」とは明確に「区別」されています。神内部の差異があり、神の中に交わりがあるのでしょうか？キリストの纏う衣服には、没薬、アロエ、肉桂の香りが満ちている！ちょっと想像できない香りですね！神のみ子、あなたを歌う弦楽器の調べは象牙の宮殿に響くと言っています。

２．「王妃」（花嫁）の登場

王・花婿に対して、「王妃」（šêgāl）がオフィルの金で飾りたてられてキリスト、あなたの右に進み出てきます。「王妃」は諸国の王女たちや娘たちの中から選ばれた女性です。神の選びの民、キリストの花嫁としての教会でしょうか。むろん、イエス様もパウロも信仰を結婚に譬えてはいますが、「花嫁」は危険な言葉でもあります！一方的に女性に純真、従順を求めてはなりません。

娘よ、聞き、考えなさい。自立して王と結ばれた以上、出身の自分の民と家と父を忘れなさい。同じような分離の勧めがマタイ 8:19－22、マルコ 10:23 - 31 に伝承されています。人は、委ね、捧げ、忘れ、棄てて、関係性を「受け取り直すこと」で自由にされるのでしょう。「ティルスの娘」（13 節）が王妃となったのか、この王妃を羨望の目で見ているのか？ツロ、異教徒の王女であったから自分の家を忘れよと言っているのか（A. Weiser はこの王妃はツロの王女であったとする）解釈は分かれます。大切なことは、過度の宮廷様式を強調しないことです。王室愛好はどこかで人間関係を貴賤で歪めるからです。

彼女は、栄光に輝き、その晴れ着は金襴緞子、色糸の縫い取りがあり、多くの伴う女性たちを連れて宮殿に進み入ると言います。そして、子らを得るであろう。異性愛の結婚を絶対視することから来るハラスメント、結婚しないで一人でいること、子どもを持たないことも神の「祝福」なのです。一人であっても人は関係性の中におり、関係性の中にあっても一人なのです。

３．諸国の民の前で（18 節）

キリストと王妃のこの物語は二人だけのものではなく、諸国の民らが祝福を得る基となるであろうと言います。教会が主イエス様から委託された福音宣教を覚え、自己目的化しないように留意する必要があるでしょう。「あなたには父祖を継ぐ子らが生れ/あなたは彼らを立ててこの地の君とする」（17 節）わたしたちは福音を分かち合うことで、子らを得ること、彼ら彼女らが地を受け継ぐように祈りましょう。